

内藤佳奈子：日本藻類学会員として 10 年

日本藻類学会創立 60 周年おめでとうございます。私が日本藻類学会に入会したのは第 27 回大会（三重・2003）参加のときでした。「赤潮藻類における難溶性鉄利用の検討」という題目で研究成果を口頭発表いたしました。農学研究科に移籍して最初の学会参加であり、それまで所属していた化学分野の学会とは異なり、藻類研究のプロフェッショナルである方々の前で発表することに特別な緊張感を持ったことを今でも覚えています。あれから会員として 10 年が経ち、微細な藻類を生理生態学的に追及し続け、現在では‘微細藻類と鉄’というキーワードから名前を思い浮かべていただけるまでに、本学会における様々な場面によって、藻類の世界に関する知識や魅力を磨いて頂き、藻類学の研究者として成長させていただいたものと感謝申し上げます。また会員 5 年目には第 4 回研究奨励賞という、若手研究者として名誉ある賞をいただきましたことは誇りとなり、研究に対する意欲と情熱、責任感が更に高まりました。と同時に京都大学時代に行った微細藻類による鉄取り込み機構に関する研究を高く評価していただきましたことは、教職に就いて間もなくの私にとって、新天地広島での研究教育活動への大きな支援ともなりました。

私が研究対象として微細藻類を扱うようになったのは、理学研究科化学専攻の修士課程 1 回生のときでした。当時の指導教員であられた松井正和先生（京都大学名誉教授）から研究テーマについて「学部生のときに金属錯体の構造解析をしていたから、植物プランクトン由来のシデロホアはどうかですか」と御提案いただきました。これは地球温暖化対策として、大気中の CO₂ を吸収する植物プランクトンの光合成能が鍵だ！という地球化学的研究課題です。今でこそ広く知れ渡っているお話ですが、当時は Martin の鉄仮説に基づいた天然シデロホアを利用するという独創的な御発想に驚かされ、感服いたしましたものでした。そして、微細な藻類の偉大なパワーを知ることになりました。

真核微細藻類からの鉄運搬体であるシデロホア（3 価の鉄と選択的に錯生成する有機配位子）の研究を行うためには、外気や試薬、容器からの鉄汚染を避けるクリーン技術と対象生物の無菌培養操作が必要となります。当初は培養？生物？という心持でしたが、当時農学研究科におられた今井一郎先生から藻類培養についてのノウハウを御教授していただくことのできる環境にあり、昼夜を分かたず研究に励んだものでした。所属していた研究室は陸水・海水中の微量元素の多元素定量法の開発などを行っておりましたので、その化学分析技術を組み合わせることによって、真核微細藻類が産生するシデロホアの解析に取り組むことができました。博士後期課程の後、ありがたいことに農学研究科の中原紘之先生（京都大学名誉教授）の研究室でお世話になることとなり、本格的



撮影：株式会社ニックネーム・ドットコム

に藻類の生理学的特性とくに赤潮藻類について深究していくことになるのでした。

現在は、微細藻類を研究対象の中心とした水圏化学・環境科学を専門分野として研究教育に携わっております。私たちの身近な環境問題には、その原因にも対策にも藻類の関連しているところが多く、それは藻類の多種多様性によるところでもあります。この点に関して「藻類」に関するあらゆる分野の研究の発展と普及を図っている本学会の果たすべき役割への期待は大きいのではないかと思います。今後 70 周年、80 周年、90 周年、そして 100 周年へと向けて日本藻類学会の益々の御発展を願うとともに、微力ながらもその一端を担えるよう藻類学における研究と教育活動に邁進していく所存でございます。将来的には大会が年 2 回の開催となり、研究発表や情報交換、会員相互の親睦の機会が増えることを望んでおります。そのためにも、次世代の担い手である学生たちに藻類の世界の魅力について語り続けていきたいと思っております。

（県立広島大学生命環境学部環境科学科）